

## 宗教画の鑑賞教育活動に臨む

—— その計画・運営と担当学生の変化 ——

内 藤 隆\*, 山 田 芳 明\*, 藤 原 伸 彦\*\*,  
荒 田 千 鶴\*\*\*, 齋 藤 友 紀 子\*\*\*\*, 齋 藤 綾 子\*\*\*\*\*

(キーワード：絵画鑑賞教育, 宗教画, 地域協働活動)

### I. はじめに

日本の子ども達は、童話「桃太郎」の挿し絵を見れば、一目でそこに描かれた人物や、額に巻かれた鉢巻きのマークの意味、付き従う動物の種類やお互いの関係性を理解できる。しかし、もしその話を知らなかったらどうだろう。ここでもし事前の情報通知を否定する形の対話型鑑賞を試みたとしたら、桃のマークが面白いとか、動物が生き生き描けているとか陳腐な回答しか出て来ないに違いない。

では西洋の名画ではどうであろうか。バロックやルネサンス及びそれ以前の作品は、旧約・新約聖書のストーリーやギリシャ神話がテーマとなっていることが多い。これらの絵画作品は、何も知識がなければ只の「良く出来た(社会的に有名な)美術品」だが、そのテーマとされている話さえ知ってしまえば、日本の子ども達が桃太郎の絵本の挿絵を見て楽しめるのと同様に、話の登場人物を捜して楽しみながら見ることができる。

鳴門市・鳴門教育大学・大塚国際美術館の三者で組織された地域文化財教育活用プロジェクトの一環として、我々は大塚国際美術館を会場に地域児童に対する美術教育活動「N\*CAP」をこれまでに10年に渡り実施して来た。徳島県鳴門市にある大塚国際美術館は、古代壁画から現代絵画まで、世界25カ国、190余の美術館が所蔵する西洋名画1,000余点を複製陶板画という形で展示する世界でも珍しい施設である。この美術館ではミケランジェロによるシステーナ礼拝堂やジョットのスクロヴェーニ礼拝堂も原寸で空間ごと再現されるなど、日本国内の他の美術館と比較してバロック以前の作品展示も豊富に揃っている。N\*CAPはこの美術館で鑑賞や図画工作を内容とした活動を年4回、また鳴門市内の公園で鳴門市が主催して行われる教育イベントに年1回、合計5つの催しを、有志大学生が中心となって企画運営する。

N\*CAPの活動を続ける中で、我々はこの「物語を知ってから見た方が楽しめる絵がある」という点を再認識し、この地域の子ども達にもそれを味わって欲しいと考え、あえて宗教画を中心に選び「旧約聖書」をテーマにした活動を企画し、2009年3月1日に実施した<sup>1)</sup>。

我々は2009年3月の活動を第一歩と考え、これから得られた反省事項を活動改善に応用しつつ、この後のテーマとして「新約聖書」「ギリシャ神話」を順に設定して、今後も年に一回程度、試行継続することとした。

「旧約聖書」をテーマにする時も同じ心配があったのだが、「新約聖書」はまさに「キリスト教」の教典であり、それは良い意味でも悪い意味でも皆がすぐにイメージする「生きた宗教」そのものである。前回の活動では幸い参加児童からの目立った「抵抗感」は見られなかったものの、大塚国際美術館を訪れる一般客の中にもキリスト教絵画に抵抗感を示されるケースがある<sup>2)</sup>という事実があったため、旧約聖書を扱った前回にも増してプレッシャーが強かった。

そればかりではなく、この前年度までの活動経験から解決すべき事項が幾つかあった。

まず、各回の活動の企画運営リーダーが年5回のそれぞれの活動終了後に慰労会で推薦決定される習慣となっていたことである。企画運営リーダーには重い責任と負担がかかる。自分たちのアイデアを推進するだけでなく、会議でスタッフの意見を集め、工作材料も鑑賞内容も精選していかなければならない。そのため、企画運営リーダーの推薦決定の瞬間が訪れる度に気まずい緊張感が学生たちの中に流れる状況が生まれ、好ましい雰囲気とは言いがたかったため、これを解決する方法を考えなければならなかった。

\*鳴門教育大学芸術系コース(美術), \*\*鳴門教育大学教員養成特別コース, \*\*\*大塚国際美術館,  
\*\*\*\*徳島市沖洲小学校, \*\*\*\*\*石井町高原小学校

前年度の「旧約聖書」をテーマとした活動では、担当コーディネーターがその運営内容を決めすぎであったと感じられた。運営を行う学生たちの企画自由度が抑制され、コーディネーターから見ても彼らのモチベーションに若干の影響を与えたように見えたのだ。

時間配分についての手落ちもあった。子ども達の集中力継続可能時間よりも計画内容を優先してしまったため、館内作品鑑賞や各自の制作作品の相互鑑賞時に子ども達に疲労が見られたのだ。

他にも、多動気味の児童にグループリーダーが付きっきりになってしまうという状態が起こった<sup>3)</sup>。

さて、ここでは活動の流れを紹介するとともに、学生達がどのように活動の改善を図って行ったかを紹介する。また、この活動を通して企画運営の責任者役を担当した学生達に微妙な変化が見て取れた。これについても述べたい。

## Ⅱ. 企画立案の流れ

### 1. 企画運営リーダーの決定とテーマ通知

我々はまず企画運営リーダーの選抜方法の改良から行った。2009年4月初旬のN\*CAPの年度最初の企画会議で、この年度に関わる各イベントの企画運営リーダーを決定した。一年の活動の一番最初に5回の活動の各担当2名ずつを決めてしまったのである。この際、2009年度最終回の企画運営リーダーとしては当時本学学部生であった齋藤友紀子と齋藤綾子の2名が選ばれた。

なおこの初回の会議に前もって、この年度最終回の活動のテーマについては「新約聖書」としてくれるように、スタッフにはコーディネーターの1人である内藤から伝えられていた。最終回の企画運営リーダーとなった二人は、前年度の「旧約聖書」の活動にも参加しており、また事前にテーマについての情報も伝わっていたため、当初よりある程度の覚悟を持って選ばれている。

さて、この二人には内藤から改めて「テーマは決めるが内容は自由に構築して欲しい」と伝えられた。先にも述べたが、前年度には実施内容をコーディネーターが決めたことで、学生たちのモチベーションに影響した経験があったためである。彼等の自由度を広げることでより良い活動を期待した。

尚、この年度以降「毎年の年度最初のリーダー決定」が定着した。これ以後は、各回の反省会の内容等の申し送りも、よりスムーズに行われる様になった。

### 2. 取 材

第4回活動の企画運営リーダー2名は、活動実施の4ヶ月前の2009年11月頃には、大塚国際美術館での下調べを開始した。勿論、常々活動に利用している施設なので、どこにどういう展示物があるかは大凡判っている。しかし、新約聖書の内容に当たるキリスト教絵画を取ってじっくり見るような経験はしていなかった。

事前の参考資料としては、聖書やその関連絵画に関する簡単な解説本<sup>4)</sup>、前年度の「旧約聖書」をテーマとした活動の際に美術館学芸員の荒田が作成した聖書をテーマとした館内展示作品のリストを利用した。また荒田からは別の資料として「大塚国際美術館全作品集」から「スクロヴェーニ礼拝堂壁画」<sup>5)</sup>の部分抜粋を提示された。これは聖母マリアの誕生からイエス・キリストの復活・昇天、最後の審判までを描いたジョットのスクロヴェーニ礼拝堂の各場面を解説した資料で、その作品ばかりでなくキリスト教祭壇画の各場面を理解するための参考資料としても非常に役立つものだった。

彼等の取材活動は、この時期から活動実施の一週間前まで隔週程度の頻度で行われ続けた。

### 3. 企画会議

N\*CAPの企画会議は、参加学生たちの都合から毎週月曜日の夕方6時30分からとなっていた。この活動の最初の企画会議となった12月14日には、企画運営リーダーからスタッフ一同に「新約聖書をテーマとして取り扱う」ことが発表された。

これには、数名の院生スタッフから「布教活動みたいで嫌だ」と言う否定的な意見が出された。一方で、美術館の学芸員の1人からは「(良きサマリア人の例え話のような)キリストの教え」については触れるのか、というような話題も出た。

この問題についてはスタッフ達の間でも迷いがあり、最初に相当時間をかけて議論した。結局、展示作品の内容からテーマを「キリストの生涯の物語」とし、「教え」には触れない形にすることとなった。難しい議論だっ

たが、これらの話し合いを通して逆にスタッフ同士により強い結束力がもたらされたと感じられた。

#### 4. 工作活動の立案

従来、N\*CAPの活動では、「美術館内の鑑賞活動」と「簡単な工作活動」をセットとしてその内容としてきた。企画運営リーダーの二人は取材と同時進行で、工作の内容も検討し始めた。二人は本学図書館でも下調べを行い、そこで中世ゴシック美術を取り扱った全集図版<sup>6)</sup>等からステンドグラスに目を付けた。

理由は、ステンドグラスの図版そのものが、同時代の他ジャンルの美術品図版（彫刻や壁画など）と比較して一段と美しさを際立たせていたことで、特にフランスのシャルトル大聖堂のそれは二人の心を十分に掴んでいた。また活動の舞台となる美術館が絵画という平面作品を中心としているため、これに合わせて平面的な造形物を選ぶ必然性もあったのだ。

初回の会議では、企画運営リーダーの二人から工作活動の内容としてステンドグラスを採用したい旨についても提案された。すると直ちに教員やメンバーから疑問の声が多く出された。このイベントの工作の内容は、大学生の試作で30分程度で出来る内容でなければ使うことが出来ない。このことは従来からの経験で十分判っていた。皆が皆、1時間半程度しか余裕の無い児童との工作活動の内容としては技術的に難しいと感じたのである。ビニルシートの様な素材をベースに色セロファンを切って貼る方法もあるが、大きさに限界もあり、セロファンだけをそれぞれの形に切って並べることを想像するとどうしても時間内に収まるとは思えなかった。

教員の山田からは迂回策として「ピーチガラスの様な素材を使い、紙粘土や漆喰の様なものを薄く敷いたものに埋め込んでどうか」と言うアドバイスが出された。具体的なイメージは描けないが、透過させた光はガラスの方が美しいはずだからだ。しかし、取り寄せる材料費がネックになるという話になった。また最初に「人物などを描いてキリストの生涯のストーリーを作りたい」という目的があったため、結局支持体としてビニルシートを用いた工作方法をとり、実施までの期間に試作を重ねることとなった。

#### 5. 特別支援に関する勉強会

多動気味の児童に対応する準備としては、齊藤綾子の提案で年度の最初である2009年4月から勉強の時間を用意した。この勉強は、N\*CAPの全ての活動に直ちに必要とされたからである。毎回の企画会議後1時間程度の時間をとり、多動性障害についての資料等を探し皆で勉強した。また、実際のケース等については本学の特別支援教育専攻の大学院生に来てもらい、話を聞くなどした。

若干他の子どもと反応が違っているが、我々にとっても大切な児童であり、イベントにもしっかりと関わって欲しいし、楽しんで帰って欲しい。しかし、簡便な対策などはなかなか無い。結局、対策としては自由に行動出来るスタッフを作っておき、問題の生じたグループに暫時派遣し、該当児童と一対一の関係を維持できるようにする方法をとることとなった。

### Ⅲ. 実施準備

#### 1. 工作内容の改良

2009年12月15日の放課後、日曜大工店で手に入れた一番薄手のテーブルクロス用ビニルシート（160cm四方）を使い最初の試作を行った。簡単に下書きした模造紙の上にビニルを敷き、その上に黒ビニルテープで輪郭をとり、油性の色マジックで彩色した。しかし、大学生3名でかかった時間が2時間、輪郭に貼ったビニルテープでビニルシートに皺がよるという結果で、改善策を講じる必要に迫られた。

しかしながら試作品は会議に使っている部屋の窓に貼り翌日の昼に改めて見ると、ステンドグラスに似た色とりどりの透過光が美しく見栄えもした。改めてこの作品形式に希望を持った。

それから数度に渡る試作を2010年1月一杯までの間に繰り返した。最終的に「黒ビニルテープは額縁として使う」、「輪郭線はゼブラ社の油性マーカー『マッキー』の太い方で表現する」、「着色用には寺西化学工業社の水性顔料マーカー『アクアテックツイン』8色セットを使用する」、などとした。画材のマジックマーカーを水性・油性と分けたのは、着色の際に黒で描いた縁の部分が消えない様にするため、また彩色時にマジックの色が輪郭の色を取り込み黒く濁ってしまうのを避けるためである。またセロファンも均一な色合いが得られることから時間の余裕を見て使うこととした。同時進行で、学芸員の荒田を通して活動会場となる美術館内のオープンスペースの窓ガラスにマスキングテープでこのような作品を貼ることができるか、事前に美術館側から許可も取った。

オープンスペースのガラス窓の幅が各140cmであることから、工作活動用にはこれより一回り小さい130cm四方のビニルシートを基底材料として用意することにした（今後これをベースシートと呼ぶ）。ベースシートの大きな画面を油性マーカーの線で9分割した。分割されたそれぞれの部分は幅45cm、高さ40cmの原則横位置、中央部上下だけは同じ大きさの縦位置、更に中央のみは30cm四方の正方形である。

この一つのフレーム（45×40cm）の大きさだと、学生達の試作では丁度25分程度で仕上げることができた。子ども達には2人で一つのフレームを描いてもらうことを想定し、通常の参加人数が50名弱であることから24個程度のフレームが必要とされた。これによりベースシートの枚数は4枚に決定された。



図1. 「窓に貼ったベースシート」

各ベースシートの中央上部のフレームにはシートの差別化を図るためハート・スペード・ダイヤ・クローバーの各マークを、また30cm四方の中央部にはN、C、A、P（活動名の頭文字）の大文字を配置することにした（図1）。イメージの順番は本物のステンドグラスの構成を参考に<sup>7)</sup>左から右、下から上、へと配置することとした。使用する場面は「受胎告知」「キリストの生誕」「東方三博士の礼拝」「ヨハネによる洗礼」「最後の晩餐」「キリストの受難（キリストが十字架にかけられた場面）」「キリストの復活・昇天」の7場面とした。この内「キリストの受難」場面だけは数合わせの目的も兼ねて、スタッフが先に描いて貼っておく。子ども達に用意された空欄のフレームは、一つのベースシートに6つとなった。こうして4つのベースシートで子ども達が描画する部分が24部分、きれいに用意できた。

活動手順としては、参加児童全体を6班、各8名前後へと分け、1班につき1つの場面の話を伝え、2名で1つのイメージを描いてもらう計画である。1つの班につき4枚の同じテーマの絵ができる。これを夫々のベースシートに貼って行く。すると4枚のベースシートには各班からそれぞれの場面の絵が集まり一つの話が出来上がる。この配分なら子ども達全員が上手い具合に楽しめると思った。

また計画中から活動全般に渡り、ステンドグラスに似せたこのシートをスタッフ間ではステンドシートと呼ぶこととした<sup>8)</sup>。

## 2. 活動計画の絞り込み

工作内容がほぼ固まったことから、活動全体の流れを考え、以下の流れで進めることになった。

「導入・鑑賞」……寸劇を見せ、ステンドグラスについての説明をする。次に、各グループに分かれ、それぞれが担当する部分の話がテーマになった館内の展示作品を鑑賞する。子ども達は各班のスタッフと話し合いながら、描かれているストーリーを理解し、絵に共通する大事な特徴をとらえる。

「制作」……昼食休憩を挟み午後からは、班内で二人ずつの組になり、ステンドシートの制作をする。手順としては、画用紙に鉛筆で下描きし、その上に透明ビニルシートを敷いて黒い油性ペンで線をなぞり、カラーペンやカラーセロハンで色をつけていく。

「相互作品鑑賞」……最後に出来上がったステンドシート（各班からの絵）を所定のベースシートの位置に貼り付け、その班ごとに絵を紹介し、更に4枚の各作品を、絵を紹介しあったグループで鑑賞する。これを終わり次第アンケートを取り、解散。

ここまでの話し合いの際、制作前に「それぞれの部分だけの話を伝える」というのでは、話の流れが掴めないのではないかという意見が出た。しかし、全体の話はそれぞれのイメージを組み合わせてから、子ども達同士で話し合わせたいという意図から、「全体の筋までは伝えず、前後の脈絡が判る程度」という微妙なものとした。これに対して各班のスタッフが知恵を絞る、判りやすい解説案内を目指し、中には独自に紙芝居まで用意した班もあった。

尚、この解説や活動中にはキリストや聖母マリアなどの人物に敬称を付けない様に内藤から注意をした。絵画作品の登場人物の捉え方を、宗教のヒーローとしてではなく絵画の物語の人物として理解して欲しかったためだ。

また、完成時にはそれぞれの作品を写真に撮り、各グループでの相互鑑賞の後、プロジェクターで改めて投影し、企画運営リーダーからのコメントを出すことにした。各作品の良い点を拾い上げ、子ども達を誉める為である。

#### IV. 活動実施

##### 1. 募集

この活動の通例通り、鳴門市子どもいきいき課から地域紙での情報掲載や市内各小学校へのチラシ配布により参加児童の募集がかけられ、2010年2月2日～5日までの期間に定員40名で募集受付を行った。当初ほぼ通常通りの50名の応募があり、また活動開始時刻までに2名のキャンセルが出て48名の参加児童数（運良く計画に見合った人数）での活動となった。

##### 2. 実施

2010年2月27日午後、現場となる美術館2階のオープンスペースに搬入作業を行った。机・プロジェクター・パソコン・プリンター等のセッティングについては概ね前年度の活動時と同様にレイアウト<sup>9)</sup>した。

翌日の2月28日、今回の活動を実施した。当日の動きは図2のスケジュール表の通りである。

今回のスケジュールでは前年度の反省を活かし、工作以外の各行動は大方40分～45分程度で切り替わる様に設計してある。午前中の館内展示作品鑑賞なども表には60分枠で示してあるが、実際にはオープンスペースからの移動や各自のメモ書きの時間を考えて、鑑賞自体は大凡45分程度に抑えるように工夫されている。

##### 3. 活動中の状況

今回についても当初心配した「話の内容に宗教を感じて嫌悪される」という様子は参加児童からは全く感じられなかった。

時間配分も細心に計画したことが奏功し、活動中に子ども達が疲れや眠気を示す様子は一切見られなかった。

また冒頭に解説したのがストーリーの一部だったにも関わらず、前年度の旧約聖書をテーマとした活動のケースでも見られた、絵の中の人物や物を指差しながら鑑賞する様子が多く見られた(図3)。

この美術館では同じ題材の作品を集めた「テーマ展示」という展示形式をとっている場所が数多くある。例えば「受胎告知」の場面を描いた色々な作家の作品を隣接する2部屋に集めていたりする。この展示配置は特に今

| 時間   | 子どもの活動と意識の流れ  | 指導者の役割   |
|------|---|--|
| 20分  | <p><b>【導入】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆集まって班ごとに座る。</li> <li>◆寸劇を見て、今日の活動内容に興味を持つ。</li> <li>◆スライドを見たり説明を聞いたりして、今日の活動内容やめあてをつかむ。</li> <li>◆班ごとに分かれ、自己紹介をする。</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもをスクリーン前に集め、名札のシールをもとに班ごとに並ばせ、座らせる。</li> <li>○OSをシャルトル大聖堂のような空間にする、という内容のコントをする。</li> <li>○活動の流れと目的、スタンドグラスについての説明を行う。</li> <li>○館内での諸注意をする。</li> <li>○子ども、スタッフともに、同じ班のメンバーを確認する。</li> <li>○班内での決まりごとや、活動内容について話す。</li> </ul>  |
| 60分  | <p><b>【美術館めぐろう】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆班ごとに美術館めぐり、その班の主題に関連した絵を鑑賞する。</li> <li>◆鑑賞した絵に共通する特徴やお話の大事な要素などを、ワークブックにメモする。</li> <li>◆お話の内容や絵の構図について班内で共通理解し、どのような話だったかをワークブックに書き込む。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>○絵の鑑賞を通して、それぞれの場面のお話を理解させる。</li> <li>○その場面にはどのような登場人物がいるか、そのポーズはどんなかや、絵の構図などに注意して鑑賞させる。</li> <li>○他班の友達にお話を分かりやすく紹介することを意識させながら、鑑賞で考えたことや分かったことをもとに、話をまとめさせる。</li> <li>○カメラ係は、のちの参考のため、鑑賞した絵画の写真を撮影しておく。</li> </ul>   |
| 130分 | <p><b>【スタンドシートを作ろう】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆2人ずつのペアになり、下書き用紙にスタンドシートの下書きをする。</li> <li>◆透明ビニールシートに、スタンドシートを制作する。</li> <li>◆下書きの用紙とビニールシートをセロハンテープで固定し、下書きの線を上から黒油性ペンでなぞるようにして、輪郭線を描いていく。</li> <li>◆輪郭線ができれば、カラーペンやカラーセロハンを使い、色をつけていく。</li> <li>◆それぞれの区画の絵が完成したら、「スタンドグラスを鑑賞しよう」での発表内容(工夫点など)を考える。</li> <li>◆班ごとに、記念撮影を行う。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもを2人ずつのペアに組ませる。このとき、出来るだけ学年が偏ることを避けるようにする。(●、●、●、●の4グループに分ける。)</li> <li>○子どもが2人で協力して、活動を進められるよう促す。</li> <li>○直接ビニールシートに描くときには線が太くなり細かい表現が難しくなるため、下書きの段階から気をつけさせる。</li> <li>○絵に表わすのが難しい子どもには、参考作品やラミネートの絵を見せたり、ワークブックのメモを活用させる。</li> <li>○作業がスムーズにいくよう、必要に応じてスタッフが支援する。</li> <li>○班ごとに、子どもの様子を見ながらブレイクタイムを設け、水分補給やソイジョイを食べる時間をとる。</li> <li>○撮影後、カメラ係は班の集合写真を印刷する。</li> <li>○記念撮影ができた班から、机を横にはける。</li> </ul>   |
| 70分  | <p><b>【スタンドシートを鑑賞しよう】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆スタンドシートの鑑賞方法について理解する。</li> <li>◆班を解体し、新しいグループで、スタンドシートの鑑賞をする。(15分)</li> <li>◆1班のペアから順番に、自分たちの担当のお話や工夫した点について、発表する。</li> <li>◆それぞれのスタンドシートを、グループごとに鑑賞する。(15分)</li> <li>◆まとめの話を聞く。</li> <li>◆ワークブックに感想を書く。</li> <li>◆アンケートを記入する。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>○子どもをスクリーンの前に集め、班ごとに並んで座らせる。</li> <li>○班の分かれ方やスタンドシートの見方を、子どもにも説明する。</li> <li>○子どもたちが説明を聞いている間に、スタンドシートを窓に配置する。</li> <li>○新しいグループ(●、●、●、●)に分かれる際、ペア1組につき、同じ班のスタッフが1人以上はつくようにする。</li> <li>○「十字架のキリスト」の場面については、ニコからの手紙という設定で、スタッフが発表する。</li> <li>○各グループで、ニコからの手紙を読み上げるスタッフは、発表の全般を通して司会をする。</li> <li>○子どもたちが発表しやすい雰囲気をつくる。</li> <li>○自分以外のグループのスタンドシートを、同じグループで鑑賞する。</li> <li>○それぞれの班のスタンドシートをスライドで見せながら、本活動で学んだことを再確認させる。</li> <li>○班ごとの集合写真をワークブックに貼らせる。</li> </ul> |

図2. 活動スケジュール表

回の鑑賞活動には大変役立った。殆どグループを移動させずに、各作家の描き方の違いを比べることができ、子ども達もこれを楽しんでいた。

午後のステンドシート制作活動では、子ども達の反応が大変良かった。暫く制作を進めては、セロファンやマーカーで彩色途中の作品を窓辺に持って来て、上手く塗れているかを確認したり、色の重なり具合を検討したりする様子が多く見られた(図4)。また、完成作品の一例と相互鑑賞の様子が図5、図6である。

こうして全ての活動は時間通りに進み、非常にスムーズに終わることができた。

#### 4. 活動後の状況

子ども達の作品4点は2010年3月27日～4月20日の期間に、大塚国際美術館地下3階のセンターホールで展示された。活動中から美術館側から「子ども達の作品を一定期間館内展示してはどうか」という声が出ていた為だ。子ども達の制作した作品については、活動後にやはり地域文化財教育活用プロジェクトに別の面から関与されている本学の山本朝彦教授からも「作品を持ち帰りたがっていた児童も居たらしく、親からも作品を見たかったという要望が出ていたようだ」という情報を伺うことができていた。

### V. 今回の活動から見えたもの

#### 1. 企画運営リーダーに見られた変化

コーディネーターの視点から見て特に興味深かったことは、美術館内での下調べの頃から企画運営リーダー2名の「絵画の鑑賞能力」に明らかな変化があったことだ。彼等は資料に当たりながらの下調べの間に、色々な事を発見して帰って来るようになった。

具体的には、ドゥッチョ・ディ・ブオニンセーニヤの「マエスタ(荘厳の聖母)」の背面にある「最後の晩餐」のシーンに子豚の丸焼きの様なものが描かれているのを見つけて来たことがある。豚はユダヤの戒律で食べてはならないことになっているので(キリスト自身もユダヤ人である為)、非常に不自然な絵だという話になった。後で調べると、これは実際には子羊を焼いたものを描いたものであるらしい。羊の頭とつま先を落として丸焼きにしてあるため、そのように見えるようだ。

またジェンティーレ・ダ・ファブリアーノの「東方三博士の礼拝」では、上部の装飾部分に作られた3つの円形部の人物像が誰を描いたものか議論をしていた。中央はキリスト、左は天使と言うのはすぐに判るのだが、右の女性が誰だがすぐには判らなかったのである。しかし、彼女らはすぐにスクロヴェーニ礼拝堂壁画の人物像配置を思い出し、それが聖母マリアであることを推定した。この様に、事前の取材自体が、特にリーダーを務めた2人にとって非常に楽しく興味深い学習となっていったようだ。文献にあたったり、同じテーマを扱った他の絵画と比較す



図3. 指差し鑑賞する子ども達



図4. セロファンを当てて色を見る子ども達



図5. 完成作品(4点のうち1点)



図6. 相互鑑賞の様子

る等して、古典の名作絵画を見る楽しみ方が次第に幅を広げているのが感じ取れた。

これには最初の時点で、彼等の知識が少なかったことも幸いしているかもしれない。リーダーとして責任と興味を持ちつつ、主体的且つ徐々に「知って学びながら鑑賞する楽しさ」を体験できた為だろう。彼女らがこの事を心から楽しんでいることが「活動を通して子ども達にその面白さを伝えたい」という気持ちに拍車をかけている様子が、コーディネーターにも非常に良く伝わって来た。

## 2. 活動自体のふりかえり

活動実施翌日の3月1日の放課後にこの活動の反省会が開かれた。今回は目立ったトラブルが無く、逆に作品展示の話も持ちかけられていたこともあってか、大方の参加学生の意見は、前年より好意的だった。また子ども達の感想アンケートの結果を見た所、通常にも増して「楽しかった」という回答が殆どを占めていた。

ただし、会議では一件だけ「新約聖書の物語を伝える、という目的にしては達成出来ていないのではないか」という意見が出された。スタンドシートの作品相互鑑賞時にはこれをおさらいしているものの、確かに時間の制限から制作活動後に改めて館内作品を見に行くことも無理であったため、子ども達がキリストの生涯の全ての話の繋がりを意識して絵画作品を見ることができるようになっているかどうかの確認はできていなかった。これについては今後の活動でも、同じスタイルをとった場合は時間の制約上完璧を期すことはなかなか難しいかも知れないが、将来的に出来るだけは改善を模索しようということになった。

時間配分についても、前年度の反省から改良を施した成果が出て、子ども達に疲れを感じさせることなく集中力を保たせたまま運営できた。

さて、コーディネーターの立場からの改善点はスタッフを務めてくれた参加学生達にテーマだけを投げ、企画自体を任せてみた部分であったが、これについては学生たちのモチベーションの高まりを明確に感じ取ることができた。権利と責任は表裏一体である。彼等に自由度を与えることができたと同時に、彼等自身の中に内容の充実に対する訴求力を高めることができたのだろう。

## 3. 別の問題点

今回の活動では、当初心配した部分でのアクシデントは全くなかったが、予想外の事態が起こった。

当日午前中に津波警報が出たのである。前日の15時34分頃にチリ中部沿岸で地震が発生し、これによる津波警報が太平洋側沿岸に活動当日午前9時35分に気象庁から発表されたのだ。午前10時からの活動開始のスケジュールで行動していた我々は、結局活動を開始してしまった。この津波の第1波は昼過ぎに日本に到達すると予報されていた。

これに対し当時の美術館理事の河内順子氏からスタッフに対し「津波が上陸した場合は、閉館後も責任をもって児童を全員保護する」との意向が伝えられた。この美術館は「地下3階」とされる部分でも実際は地上から3階以上の高さがあり、活動を行っているオープンスペースは「2階」、つまり普通の建造物にして7階以上の高さにある。この施設付近で津波を避けるに相応しい場所は大型ホテルぐらいしか無い為だった。

より不安だったのは、昼過ぎになって心配した親が車で迎えに来たケースがあったことである。鳴門市街地方面からこの美術館までの道路は主に2本あるのだが、そのいずれもが海岸沿いを数キロ伸びて来ている。もしここに津波が到達した場合、走行している車は危険にさらされる。しかしこのケースでは両親は無事美術館に到着し、結局児童本人の希望で活動を継続、この両親も美術館内で待機して頂いた。

活動後の解散は予定通り午後4時前後となったが、解散確認の連絡を鳴門市のスタッフに依頼した。各解散場所では通常より速やかに親の迎えがあり、送迎バスでの解散場所である鳴門駅からは、30分後には市役所のスタッフから無事解散の確認連絡を受けることができた。更に本当に幸いなことに、津波は最大潮位数十cmを記録しただけで収まった。

2011年に東日本大震災を経験した今、このケースの様に漫然とした判断は既にあり得ない。この活動は子ども達の安全が確保された上に成り立つ教育活動である。今後は活動中止についても即時の決断と対応をしなければならない。

## VI. おわりに

我々はN\*CAPの中で大塚国際美術館の特性を考慮して「西洋名画の物語や図像学的内容を応用し鑑賞を楽しむ」という立場をとった活動を年に1～2度取り混ぜ、実施継続している。特に今回の活動では、前年の活動と比較して幾つかの改善点が功を奏した他、企画立案について企画運営リーダー達に裁量権を持たせたことが効果を見せたと考える。また、企画運営リーダー達からは美術作品鑑賞に対する楽しみ方・学び方の幅のふくらみを見て取ることができた。

この活動は「知識を先に与えてしまう」という、現在の鑑賞教育の流行からいうと少し異質な方法を取っている。現在までの活動を通して、この特別な環境を再認識した結果、この美術館ではこの鑑賞方法が楽しめると確信したからである。しかしながらこの活動に於いても、対話型鑑賞の方法等もある程度応用している。対話型鑑賞という「鑑賞対象の絵画のコンセプト等の知識に全く触れない」という、本活動からすると全く逆のルールがあると説明される場合もあるようだ。このため一見対照的な手段に見えるかもしれない。しかし対話型鑑賞を使うことで、絵画作品の中の詳細な部分について子ども達の注意力を向けさせることにはやはり効果があると考えている。

このように我々は子ども達の知識・技術の育成に資することなら、あらゆる手段を柔軟に取り入れて改善に取り組むつもりだ。これにつけても、やはり相当勉強が必要になるだろうが、今回の様に企画立案を任せるなどの方法をとることで学生のモチベーションを高めたり、彼等の身近に資料を揃えたり<sup>10</sup>、時に応じてアドバイスをすることで、グループとしての経験則を高めたり、グループ活動の特性である「千恵の持ち寄り」を催し解決していくことも期待できるのではないかと考える。

昨今、以前と比べて学校の美術図工教育で鑑賞の重みが増してきている。今回の様に企画運営に参加してくれる学生たちには「まず自分たちが楽しんで絵画を鑑賞できる」ようになって欲しいと考える。絵の「物語」を知るだけで、それぞれの絵、その作者、その描かれた時代・環境に興味を抱くことになる。今回は特に企画運営リーダー達にこの変化を見いだすことができたことは大変幸いだった。

知的な楽しみや驚きは、他の誰かにも教えたくなるものである。この活動のある鳴門はもとよりだが、将来教員となるであろう学生達にその情熱を持ってもらい、各自が接するその地域の子ども達にも広げて行って欲しいと考える次第である。

## 注釈及び引用文献

- 1) 内藤隆, 山田芳明, 藤原伸彦, 井上千鶴, 平田茂樹, 東山豊, 「宗教画の鑑賞に挑戦する I—大塚国際美術館での教育イベントの中で—」『大学美術教育学会誌第43号』2011年, pp. 215—222,
- 2) 前掲書「宗教画の鑑賞に挑戦する I—大塚国際美術館での教育イベントの中で—」, p. 215, I 「はじめに」の中で「中世のキリスト教絵画の説明をすると来客の反応が大きく分かれる」と書いた。
- 3) 前掲書「宗教画の鑑賞に挑戦する I—大塚国際美術館での教育イベントの中で—」, p. 220, VIの1 「活動上の反省点と対策」を参照されたい
- 4) 中見利男, 「面白いほどよくわかる聖書のすべて—天地創造からイエスの教え・復活の謎まで—」日本文芸社, 2000年, 及び早坂優子, 「マリアのウィンク—聖書の名シーン集—」視覚デザイン研究所, 1995年, 等を参考とした。
- 5) 長塚安司, 「スクロヴェーニ礼拝堂壁画」『大塚国際美術館全作品集第2巻中世』出光出版株式会社, 1999年, pp. 86—107,
- 6) 飯田喜四郎, 黒江光彦, 「世界美術大全集第9巻ゴシック1」小学館, 1995年, これ以外にも幾つかの図版集を参考としたが, 最終的には本書を最も頼りとした。
- 7) 前掲書「世界美術大全集第9巻ゴシック1」, p. 367の19行目から, シャトルル大聖堂「西正面の三つのステンドグラスの窓」の解説の中にステンドグラスの読み進め方が示されている。
- 8) 教材にもステンドグラスを模したステンドシートという名のは存在する。しかし, 窓のサイズに合わせた大きさとするには既製品のシートは小さ過ぎたため, また予算の都合上もあり, 独自にビニルシートをカットして使用する方法を取って選んでいる。
- 9) 前掲書「宗教画の鑑賞に挑戦する I—大塚国際美術館での教育イベントの中で—」, p. 218の図2を参照され



たい。

- 10) N\*CAP 企画会議の部屋は藤原が管理し、大塚国際美術館からの資料提供も受け、活動資料となりそうな書籍等を現在までも少しずつストックしている。尚、この部屋は N\*CAP 以外の幾つかの地域児童への教育普及活動用の会議室としても提供されている。

## Appreciation of the religious art works at educational workshop

NAITO Takashi\*, YAMADA Yoshiaki\*, FUJIHARA Nobuhiko\*\*,  
ARATA Chizuru\*\*\*, SAITO Yukiko\*\*\*\* and SAITO Ayako\*\*\*\*\*

In 2009, we held an educational art workshop on stories from the Old Testament at the Otsuka Museum of Art in Naruto City. This workshop is one of the activities of N\*CAP (Naruto Children's Art Park). The purpose is for local children to become more familiar with and appreciate the art. During this activity, children showed interest towards the paintings related to biblical stories and showed no reluctance towards them, which was our initial concern. However there is some room for improvement such as increasing the motivation of the university students and allocating time properly for children to be focused throughout the workshop. These are the main points that can be improved.

Using the improvement points from the 2010 workshop, we held another activity using the theme of the New Testament. This time, our coordinator only gave the university students the theme and let them delegate the activities. They let two students who were in charge of organizing the event handle all matters. These students improved the plan with their classmates taking into consideration previous workshops and carried out the plan on their own.

They held a craft workshop making pseudo stained glass using vinyl sheets which is safer and easier for children to use. In this workshop, children showed no sign of fatigue, and enjoyed doing the crafts very much while completing work of their own.

The high motivation of the students led to the success of this workshop. One of the benefits of this workshop is that the students were able to appreciate the paintings with a deeper perception. They are now able to seek out small details of biblical paintings of the Medieval Gothic Period and cherish the meanings of them.

---

\*Naruto University of Education Arts Education (Fine Arts)

\*\*Naruto University of Education Special Teacher Training

\*\*\*The Otsuka Museum of Art

\*\*\*\*Tokushima-shi Okinosu Elementary School

\*\*\*\*\*Ishii-cho Takahara Elementary School